

学 会 報 告

TEA研究会

It is easiest to do professionally acceptable research by sticking to narrow topics.

伊藤 順一

TEA (Theoretical Economics and Agriculture) 会の幹事を仰せつかって3年が経った。規約によれば、幹事の任期は3年とあるから、昨年の秋季大会でお役ご免である。また、TEA 会には昔から「45歳をすぎた会員は自主的に退会する」という暗黙の約束がある。筆者はこちらの条件もクリアしている。TEA は若い人の会であり、年寄りには彼らの邪魔をしてはいけない、というのがその趣旨である。

TEA 会の会員数は現在154名であるが、所在不明の会員と会費未納者を除くと、実数はその半分近くにまで減少する。また、春と秋の定期会に参加している優良会員は、全体の2割程度である。しかし、TEA 会では、陳腐化した共通議題で会員を長時間拘束することになれば、理論的な根拠に乏しく、自己主張に終始するような報告も皆無である。報告される論文や議論される内容は、相当に高い水準にあると自負している。

理論に言及しない研究の陥穽は、「極めて限定された国内の特定の問題について、極めて限定された数の研究者の間で、極めて限定された狭小な閉じた世界が形成される」ことであると、中安定子・荏開津典生両教授が『農業経済研究の動向と展望』のなかで述べておられる(p. 20)。こうした状況は、自己満足的なもたれあいを示すものであり、研究の独創的な発展はほとんど期待できないとも記されている。これらの批判は、おもに非計量の論文に理論文献の引用が欠如していることに向けられている。

一方、「計量論文における理論文献の引用

は、(中略)外国の既成モデルに日本のデータ(政府統計)をあてはめて計算するという研究の仕方を暗示」しており、「そのような論文の最悪のものは、単なる計算例であって研究の名に値しない」と、こちらも相当に手厳しい。荏開津教授はTEA 会40周年記念講演「農業経済学と政策分析」のなかでも、「玩物喪志」という言葉でわれわれ「計算屋」を窘めておられた。

極度に細分化された事例分析を中心としたcasual empiricismが横行し、計量ソフトを使った計算結果の公表が氾濫する原因としては、日本農業経済学会の関心が、おもに国内問題に向いていること、大学・研究機関が安易な成果主義を採用していること、大学院・研究機関における人材育成の怠慢、公募制による教員・研究員の採用などが関係している。採択率が異常に高い『論文集』の類を刊行する学会や研究会が、そうした風潮を煽っていることも否定できない。幸いにもTEA 会は成果主義の弊害を免れている。なぜなら、報告実績は、少なくとも外の世界からは成果としてカウントされないからである。

2人の先生によって指摘された問題は、一方(非計量、計量)が他方の欠点を知悉していながら、自らの欠点に関しては鈍感な態度をとり続けることによって、よりいっそう深刻化するものと思われる。非計量派が計量派を事実無根のでっち上げと軽蔑し、後者が前者を理論のない経験主義と蔑んでいる状況からは、なんら生産的な議論は生まれない。

非計量の研究会がどのような改善策を講じておられるのかは、関知せざるところであるが、TEA 会では、最近、日本の政府統計を用いた計量分析の報告が極端に減った。過去3年間(6回)のTEA 会で報告された43の論文のうち、24本が途上国を中心とした海外の農業・農村をテーマとしており、その多くが、報告者によって独自に収集されたデータに基づいている。この点に関しては、とくに、大学院生と農業経済学以外を専門とする会員諸

氏の貢献が大きい。なんとも羨ましい限りだが、修士・博士論文の執筆のために、大学院生が外国に出かけ、データを収集できる時代なのである。

もちろん、筆者も承知しているが、外国、とくに途上国での調査は、多くの精神的・肉体的な辛苦を伴う。今回の TEA 懇親会でも、海外生活におけるコミュニケーション、食事、トイレが話題になっていた。不思議なことに、そこに悲壮感はなく、各人が実に楽しげに「自慢話」を披露していた。政策研の中国雲南省調査でも、これらの点について多くの悲喜劇を生んだが、それをここで紹介する訳にはいかない。懇親会では海外調査の話とは別に、大学院生の煩惱に接し、大いに嫉妬心をかき立てられた。

話が脱線したが、TEA 会の報告を聴いて、もう一つ気づく点は、報告者が必ず先行研究に言及することである。その内容は、単に計算方法に止まらず、当該研究領域の到達点を示すものとなっている。研究の最大の目的は学界に対して「独創的な something new」を提供することにあるから、文献への言及は不可欠な作業である。にもかかわらず、多くの（農経関係の）研究会では、この部分が疎かにされている。自説をサポートするために、事例的な文献だけを引用する場合さえ見受けられる。先行研究に対して自らの位置づけをしないという行為は、それが研究報告ではないことを告白しているに等しい。

文献の引用について付言すると、学術雑誌の場合、査読者あるいは編集委員がレファレンスに関してコメントすることが多い。「必読の書籍・論文が引用されていない」というわけである。とくに外国雑誌については、必ずといってよいほど、こうしたコメントがつく。査読者はその分野の専門家であるから、場合によっては、「自分の論文を引用せよ」という助言（警告？）なのかもしれない。

残念ながら、独自データの収集、文献レビュー、経済学の知識が、論文執筆の十分条件

でないことは、経験豊富な研究者であれば誰でも知っている。多くの会員が、こうしたことを悟った頃に会の定年を迎え、TEA を去っていくのであれば、本人のみならず周囲の人にとっても喜ばしいことである。まさに、TEA : Time Ejects Associates というわけである。

なお、副題は R. Chambers 著の Managing Canal Irrigation : Practical Analysis from South Asia (Cambridge University Press, 1988) からの引用である。専門家だけに受け入れられる、狭小で些末なトピックを取り上げることへの警鐘である。同書は政策研で行っている「多面的機能プロジェクト研究」の一環として、筆者が雲南省の灌漑管理・森林保護を研究した際に、大いに参考となったが、以下の主張も傾聴に値する。“Good research does not necessarily have to be linked to immediate policy or innovation.” “Research is not a ritual, still less an exercise in producing a predetermined right answer.”

2005 年秋季 TEA 大会は 11 月 26 日、東京大学農学部で開催された。それも含めて、2000 年以降の研究会の報告要旨が TEA 会のホーム・ページ <http://muses.muses.tottori-u.ac.jp/dept/E/wfarm/matsudat/TEA.html> に掲載されている。HP の作成は長年、鳥取大学の松田敏信先生にお願いしている。会の雰囲気伝わってくる実にユニークな内容となっている。なお、次回の春季大会は 3 月 29 日、明治大学駿河台キャンパスで開催される。積極的なご参加をお願いしたい。

最後に、TEA 会では、報告者とフロアとの間の相互理解が深まるように、十分な時間がとってある。一人当たりの持ち時間としては、40 ～ 50 分である。若手研究者にとっては、ジョブ・セミナーの予行演習にもなると思う。ヘッド・ハンティングを目的とする会員が、密かに紛れ込んでいるかもしれない。